

展評 「雑記」 春陽会第十二回展

『日本新聞』 昭和九年四月二十三日付

春雨に櫻の花散る二十二日、上野の美術館で、春陽会第十二回展の幕をあけた。秋の美術展、二科や帝展と違って、その閑散さ。……下駄番の親爺も「あんまり人数が少なくて手持無沙汰です」とあくびをいてゐる。だが鑑賞者にとっては、有象無象の雑鬧ざつとうがなくて、これほど有難いことはない。

* *

それに最も目を惹く森田恒友遺作陳列がある。油絵、日本画に青年時代から晩年までの作。特にいいのは水郷の風景だ。何れも小品であるが、どんな小さな作品の中にも独依の詩興が醞酵じゆうこうしてゐる。「惜しい人でしたね」と、島田墨仙氏も言はれたが、実際、こんな作家を失つたことは、天下の損失だ。

島田墨仙(しまだぼくせん、一八六七・慶応三年—一九四三・昭和十八年) 明治から昭和初期にかけて活躍した日本画家。橋本雅邦門下。歴史画、歴史人物画に優品を残す。

* *

森田恒友遺作の外に、日本画としては、小杉放庵氏の一点があるだけ。

春陽会も、もう少し日本画の方もやつて貰ひたい。やらうと思へば、可なりやり得る春陽会だからだ。

* *

サルヴァトーレ・メルジエ氏のコマンドトゥレ・シモイ氏像二点に、羅馬風景一点は、作品のよしあしよりも、対象のものに興味を惹く。長谷川昇氏の作は依然和製ルノアル。《緑蔭》大作や《裸体》は、ルノアルのある作より上手い。《Y夫人》はそれと対照として、一段と面白い。明眸の麗夫人が、しとやかな、しかしきりつとした着物を著て、鼓つづみをやつてゐる。これは油絵だが実際は日本画だ。日本人の気持が実にはつきり漂つてゐるからだ。ただ鼓の音の聞えるところまで行つてゐない。



長谷川昇 《緑蔭》

石井鶴三氏の《婦人像》は、これに比して、ちつともよそ行きよその感じがしない。何の誇張も、飾り気もなく、自然に、落着き払つてゐる。中川一政氏は「私は、腰のおろし方の深さによつて、その人間の資格も、芸術の資格も、決まると思ふ。鶴三とは角力すもうをとつたが、今は私に角力取りの資格はない。ただ人間及び芸術の資格で鶴三にぶつかるといふつもりだ」といふ。鶴三氏ほど、人間と芸術とが一致した人はいないだらう。

* *



石井鶴三 《少女座像》

* *

小穴隆一氏の《扇》をみると、どこか芥川龍之介の作と共通する才ちからの閃きがある。大学生や若い美術愛好者らしい連中が、この絵の前に立つて、去り兼ねてゐたのも道理。

山本鼎氏の作は皆旧作らしいが活々と迫る花、市場価値第一。
 木村莊八氏の《レヴュー》や、挿絵数種をみると、この人は飽くまで人生の中に突進して、その中から何か発見しやうとしてゐる事がわかる。今様北斎といった感じがどつか匂つてゐる。

* *



木村莊八 《レヴュー》



倉田白羊 《庭》

* *

春陽会は、日本画に於ける帝展に似て、全体に纏まつた品位がある。ただし、院展と異なるところは、各作品にはつきりした個性を飽くまで発揮しやうとしてゐることだ。